論文

「ままごと遊び」に関する研究の動向と課題
―領域「人間関係」の視点から―

中平 絢子[1)]・蓮井 和也[2)]・田村 隆宏[3)]

キーワード：ごっこ遊び，ままごと遊び，保育，人間関係，3歳未満児

1．はじめに

（1）領域「人間関係」から考える幼児と遊び

幼児の好きな遊びの一つに，ごっこ遊びが挙げられる。多くの保育施設においても，ごっこ遊びは日常的に行われている遊びの一つと言えるであろう。

2022年に実施されたベネッセ教育総合研究所幼児の生活アンケート第6回によると,「お子様はどのような遊びをよくしていますか」という質問に対して，1位「公園の遊具（すべり台，ブランコなど）を使った遊び」85.5%，2位「つみ木，ブロック」66.4%，3位「ユーチューブをみる」58.7%，4位「人形遊び，ままごとなどのごっこあそび」54.7%となっている。また，同調査によると「よくする遊びについて，27年間の変化をみると，1位「公園の遊具（すべり台，ブランコなど）を使った遊び」と2位「つみ木，ブロック」の上位2項目に変化はない。また半数以上の幼児が「人形遊び，ままごとなどのごっこ遊び」をしていることも変わらない」と記されているように，ごっこ遊びは昔から変わることなく，幼児がよくする遊びであると言えよう。

ごっこ遊びには，ままごと，保育園ごっこ，お店屋さんごっこ，ヒーローごっこ（戦いごっこ）など多様なごっこ遊びが存在する。松原・大滝・織壁・富田・深沢・森末・請川（2022）は,「ごっこ遊び」研究の調査において，18本の論文を分析した結果39事例に具体的なごっこ遊び名の表記があったと示している。横山（2005，2006）は，保育現場における「○○ごっこ」という呼称は，子どもが自分で○○ごっこしていると言わない限り，保育者あるい

1）山陽学園短期大学こども育成学科
2）川崎医療福祉大学医療福祉学部子ども医療福祉学科
3）鳴門教育大学大学院学校教育研究科

は観察者が，子どもの遊びの内容から推察して命名するのが一般的であることを示唆した。河崎（2015）は，ごっこ遊びは，みたて・つもり・ふり遊び，想像遊び，象徴遊び，役割遊びなどとも呼ばれることから，呼ばれ方からもごっこ遊びが多様な形であることを示した。さらに，ごっこ遊びのおもしろさには現実との格闘行為が重要な部分を占めること，そのことがごっこの理解においても保育実践上においても重大な意味を持つと提起している（河崎 2015）。こうした指摘から，ごっこ遊びの多様さと，身近な遊びであることが言えるであろう。さらにごっこ遊びは，子ども同士で同じイメージを共有しつつ，役割分担をしながら遊びが展開されることから，そこに自ずから子ども同士のコミュニケーションや人間関係の調整が必要となり，領域「人間関係」のねらいや内容と密接に関連するものであると言える。

ここで、幼児のごっこ遊びを概観してみよう。ヒーローごっこは，多くの場合，〇〇レンジャー，〇〇戦隊などテレビ番組の登場人物を模倣して遊ぶことが多いだろう。喋り方や動きなどを観察し，憧れのヒーローになりきり，変身することを喜び，想像力を働かせて動き戦い，勝ったり負けたりやりとりを楽しみながら遊ぶ様子を，筆者らも保育現場で多く目にしてきた。しかし，実際に模倣するヒーローを幼児自身が知っている・知らない，興味がある・興味がないなど，そのヒーローもしくはそのテレビ番組自体に対する個々の認識や興味の差で，遊びの盛り上がりや展開，参加の仕方も異なることが考えられる。

お母さんごっこ，赤ちゃんごっこ，ペットごっこ等では，遊びに参加する幼児が皆お母さん役，皆赤ちゃん役，皆ペット役など同じ役をしていることも往々にして見られる。遊びに参加している幼児全員が同じ役をする場合の他に，お母さんごっこではお母さん役，赤ちゃんごっこでは赤ちゃん役が主役になるといったように，主となる役を順番に交代しながら繰り返し同じやりとりをする場合もある。どのように役割を決め，遊びを展開していくかは様々であるが，ごっこ遊びは幼児にとって楽しい，面白い遊びであることには違いがないであろう。

松原ら（2022）は，「遊びは自らのやりたい気持ちを唯一の動機としている活動であり，その中でもごっこ遊びは模倣を中心としている遊びであることから我々は保育実践におけるごっこ遊びはとても重要なものとして捉えている。」と述べている。また，松原ら（2022）は，ごっこ遊びについて，保育実践を対象とした調査結果から「ごっこ遊びの分類で集約した結果，その遊びの背景を基に日常的テーマと非日常的テーマに大分することができた。ただし事例の中には双方のテーマが入り混じった設定で展開されるものも見受けられることから，ごっこ遊びを見取る場合には，それを見取り支える大人側の柔軟な視点，姿勢も重要となってくる」と指摘しているように，ごっこ遊びには親や保育者の適切な関わりも必要であることが示唆される。

幼児は様々なごっこ遊びを繰り広げるが，特に日常生活に関連するものとして，身近な家族の生活を真似て，炊事や食事などの場面を遊びとして表現し，ストーリーを展開する「ままごと遊び」が挙げられる。ままごと遊びは幼児が日頃経験していること，身近な出来事を思い出し真似て再現していることが多いであろう。例えば，お母さんやお姉ちゃん，赤ちゃんなど家族の身近な人物の日常の行動，口癖や動きを真似て表現する。一方で，お姉ちゃんや赤ちゃんなどが実際の家族構成にはいない場合でも，幼児は想像力を働かせ，自分なりにイメージを持ち，なりきって遊ぶことができる。実物の母親だけではなく，テレビで見たお

母さん，赤ちゃんを模倣して演じることもあろう。横山（2005）は，「役になることは対象の特徴を理解した上で，架空の存在を想像すること，自分の理想の姿に変えて役になることがある」「近年の研究で，母親のまねが必ずしも自分の母親であることはなく，友達の母親のまねをしている場合もあり，その場合は友達の母親を自分の理想として再現する」と述べている。このような指摘から，ままごと遊びは日常的な遊びとして取り上げられるが，演じる役が幼児の実際の家族構成にない場合は，想像力，発想力が駆使される非日常的な遊びとも言えるのではないかとも考えられる。

幼児にとって，身近な人になりきり，人と関わったり，やり取りをしたりする姿が遊びの随所で見られるままごと遊びは，想像力，発想力が養われるものであり，人との関わり，すなわち人間関係を育む上で幼児期に大切な遊びと言えるであろう。

（2）研究の目的

ままごと遊びは幼児にとって大切な遊びであると捉えられたが，保育所保育指針（厚生労働省，2017）や幼稚園教育要領（文部科学省，2017），幼保連携型認定こども園教育・保育要領（内閣府・文部科学省・厚生労働省，2017），及び保育所保育指針解説（厚生労働省，2018）や幼稚園教育要領解説（文部科学省，2018），幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説（内閣府・文部科学省・厚生労働省，2018）にはどのように明記されているであろうか。『保育所保育指針』を次のキーワードで検索すると，「ままごと」0 件「模倣」1 件「ごっこ」3 件がヒットした。同様に『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』『幼稚園教育要領』では「ままごと」「模倣」「ごっこ」ともに 0 件であった。しかし，『保育所保育指針解説』では「ままごと」7 件「模倣」7 件「ごっこ」28 件，『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』では「ままごと」7 件「模倣」9 件「ごっこ」31 件，『幼稚園教育要領解説』では「ままごと」5 件「模倣」3 件「ごっこ」18 件がヒットする。『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』で始めに「ごっこ」という単語が出てくるのは，「1 歳以上 3 歳未満児の園児の保育に関するねらい及び内容　人間関係　内容⑥生活や遊びの中で，年長児や保育教諭等の真似をしたり，ごっこ遊びを楽しんだりする。」である。『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』では，発達の過程おおむね 2 歳に「ままごとなどの簡単なごっこ遊びをするようになる」と明記されている。

ごっこ遊びは，1 歳以上 3 歳未満児の「人間関係」「言葉」のねらい及び内容でも出てくる。しかしながら，3 歳未満児を取り上げたごっこ遊び，ままごと遊びに関する研究は，3 歳以上児と比べてまだまだ少ない。

そこで本論は，園生活で展開されるごっこ遊びの中で特に「ままごと遊び」に注目し，近年のままごと遊びに関する研究を整理し，研究の視点や研究の動向を探っていく。

2．保育施設におけるままごと遊びに関する先行研究の選出方法

「ままごと遊び」に関する近年の研究の傾向を整理し明確化するため，電子ジャーナルデータベース CiNii を用いて分析対象とする文献の検索を行った。検索日は 2023 年 9 月 11 日である。検索期間は 2000 年から 2023 年までとした。始めに，「ごっこ」をフリーワードに入力し検索した結果は 994 件，「ごっこ遊び」は 276 件，「ごっこ」「遊び」は 386 件であ

った。ごっこ遊びは家庭でも保育施設でも行われる遊びだが，本論では，幼稚園や保育所，認定こども園などの保育施設における研究傾向を探ることを目的とするため，フリーワードに保育を追加した。その結果，「ごっこ」「保育」の組み合わせは 246 件，「ごっこ遊び」「保育」は 93 件であった。この検索結果から，ごっこと保育に関する先行研究は多いことがわかる。次に，「ごっこ」は戦隊ものやお店ごっこなど，遊びの範囲が広がることから，「ままごと」に範囲を狭めて再度検索した。表 1 のように「ままごと」は 153 件，「ままごと遊び」は 42 件，「ままごと」「遊び」の検索結果は 52 件であった。

表１．ままごとに関する文献

検索ワード	検索結果
「ままごと」	１５３件
「ままごと遊び」	４２件
「ままごと」「遊び」	５２件
「ままごと」「園」	２２件
「ままごと」「保育」	２１件
「ままごと」「遊び」「保育」	１４件
「ままごと遊び」「保育」	９件

CiNii 検索日：令和５年９月１１日

ごっこと同様に保育を追加したところ，「ままごと」「保育」は 21 件，さらに保育から推測できる「ままごと」「園」は 22 件であった。なお，「ままごと遊び」「保育」9 件と「ままごと」「遊び」「保育」14 件は，「ままごと」「保育」の 21 件と重複している。以上から，本論では「ままごと」「保育」21 件，「ままごと」「園」22 件の中で，保育施設におけるもの，保育実践に関するものを抽出し概括した。対象とした論文の一覧は表 2 に示した。

表２．保育施設におけるままごと遊びに関する論文

筆頭著者	題名	発行年	掲載雑誌名
大瀧ミドリ	保育園児のままごと遊びの継続時間と既得知識における経時的変化	2003	上越教育大学研究紀要
浜田貴宏	2 友達とかかわり合いながら自分が創る自分達の生活（4 歳児）：「忍者のイメージ」・「ままごとコーナー」を視点に（第 2 章事例研究）（第 1 部金沢大学教育学部附属幼稚園第 49 回教育研究会に向けて）	2003	金沢大学研究紀要
五十嵐由利子	園庭での遊具の配置が園児の遊びに与える影響	2004	日本家政学会研究発表要旨集
大瀧ミドリ	保育園児のままごと遊びにおける意味知識の経時的変化	2004	上越教育大学研究紀要
野口隆子	保育者の持つ“良い保育者”イメージに関する ビジュアルエスノグラフィー	2005	質的心理学研究
秋田喜代美	「ままごと遊び」から考えたこと（巻頭言）	2005	幼児の教育
横山文樹	ままごと遊びの再考（1）：ごっこ遊びの意義とままごと遊びの位置づけ（幼児教育）	2005	学苑　昭和女子大学紀要
金田利子	家庭科教育と幼児教育の接点	2006	日本家庭科教育学会大会・例会・セミナー研究発表要旨集

小松孝至	母子の会話の中で構成される幼児の自己 ： 「自己と他者との関連づけ」に着目した１事例の縦断的検討	2006	発達心理学研究
平賀伸夫	保育におけるラベル表示の効果に関する研究	2006	愛知教育大学教育実践総合センター紀要
横山文樹	ままごと遊びの再考（2） ： 遊びのプロセスからの検証(幼児教育)	2006	学苑　昭和女子大学紀要
長谷川万祐	PC097 ままごと遊びの意義と役割の発展過程	2007	日本教育心理学会総会発表論文集
箕輪潤子	砂場におけるままごと遊びの発達的検討	2010	川村学園女子大学研究紀要
小椋たみ子	3 歳未満児のままごと場面，読み聞かせ場面での保育士の働きかけ行動	2012	帝塚 山大学現代生活学部紀要
二橋香代子	ままごとに対する保育者の遊び理解に関する研究	2012	人間文化研究
平嶋早織	ごっこあそびの楽しさを共有することで変化した K の友だちとの関係 ： ままごとコーナーでの楽しさの共有を土台に	2013	季刊保育問題研究
善本眞弓	時代を反映する子どものままごと遊びと保育者の役割	2016	芸術教育
藤田茜	私の園の保育環境１歳児クラス ままごとコーナーの見直し	2016	東京都公立保育園研究会の広報
藤谷未央	〈探究〉日本社会における「食材おもちゃ」の意味づけ ： 子どもを取り巻く環境の変化とままごと用おもちゃの変化に着目して	2019	幼児の教育
玉川朝子	2 歳児クラスのままごと遊びにおける 保育者の応答的関わりの一考察	2019	大阪総合保育大学紀要
村上智子	園庭におけるままごと遊びの環境構成と遊びの変化	2020	広島女学院大学幼児教育心理学科研究紀要
川島千裕	遊びと学び 2 歳児組における「ままごと遊び」の有用性	2020	保育実践研究・報告集
高橋節子	進歩主義教育思想と幼稚園の物理的環境	2021	人間環境学研究
松原乃理子	「ごっこ遊び」研究の傾向 ― 保育実践を対象とした調査に着目して―	2022	日本女子大学紀要. 家政学部
宅嶋郁	1 歳児のままごと遊び ： 模倣・見立て・再現遊びを楽しめる環境作り	2022	東京都公立保育園研究会の広報

３.「ままごと遊び」の定義

ままごととは「子供が玩具などを使って炊事や食事のまねごとをする遊び」(広辞苑, 2018) とされている。横山（2005）は，先生ごっこ，学校ごっこ，乗り物ごっこなどの遊びと，ままごと遊びを区別する一つの基準に，「食べ物をつくっている（つくろうとしている)」「食べるまねをしている」ことが挙げられることを示し，事例調査の結果から，ままごと遊びを展開，発展するために①場をつくる（空間を利用する）②役になる③物をつくる（食べ物をつくる）④演じる（ふり，または行為をする）の 4 つの要素があると論じている。

本論では，役になって調理したり皿に盛ったり，食べたりする行為を伴うごっこ遊びを「ままごと遊び」と定義する。

４.「ままごと遊び」に関する研究の動向

（1）環境に着目した研究

保育施設でままごと遊びをする場として，園庭，保育室，廊下などに設けられたままごとコーナー，砂場などが挙げられる。保育の環境には，人的環境・物的環境などあるが，物的環境のみ，人的環境のみに限定して記述されているものは見当たらなかった。

① 空間や遊びの場等に関する研究

村上（2020）は，幼児が戸外遊びをしたくなる園庭の追求が幼児の生活リズムの改善に寄与すると考え，園庭のままごと遊びを中心に環境構成の変化と幼児の遊びの変化から，ままごと遊びの環境づくりを考察した。幼児は，道具や小物の数や種類が十分でなかった場合，遊びは持続しないが，本物の道具や器具を増やし，多彩になったことで，より具体的なイメージを持って，長い時間持続してままごと遊びをする。何度も何度も繰り返し道具の操作を楽しみながら，集中して遊ぶ幼児の姿が見られたことを明らかにしている。高橋（2021）は，米国にある幼稚園の園舎を例に，幼児教育のための物理的環境は子どもの発達を援助する環境でなければならないと述べている。この指摘から，村上（2020）の結果は，「ままごと遊び」においては子どもの具体的イメージを支えるに足る道具の多彩さ，豊富さが子どもの発達を援助する望ましい環境であることが示唆される。

② 環境構成における保育者の配慮等に関する研究

平賀・平野（2006）は，教師の教育技術に着目し，様々なコーナーの表示，ままごとコーナーにラベル表示を活用しているかを質問紙法により調査した。年齢により絵や文字など表示方法に差はあるものの，ままごとコーナーを設置したクラスの 10 割がラベル表示を活用しており，表示は保育者側の効果より，片付けに対する子どもの意欲の高まりという子ども側の効果が意図されていると論考した。善本（2016）は，ままごと道具はおもちゃ箱のような箱に雑多に収納するのではなく，棚や引き出しを設けて，どこに何をしまうのかがわかるようにすると，子どもが分類・整理して片付けることができると述べている。

筆者らも，ままごと遊びコーナーで絵や文字，実物の写真を撮って掲示するなどラベル表示を保育現場で行っていた。皿を見えるように重ねて収納したり，スプーン，お玉などはそれぞれ専用の入れ物を用意したりしていた。一方で，細かすぎるラベル表示は片付けに多大な時間を要し，最後まで集中して片付けることが難しいということも考えられる。

かごや引き出しに雑多に収納した場合は，幼児も丁寧に扱わず，片付けの際もかごや引き出しに流し入れたり放り入れたりすることが多かった経験がある。一つ一つのものを大切にするという観点からも，環境を整えることは大切であることがわかる。

（2）遊びのきっかけに着目した研究

長谷川・古川（2007）は，「ままごと遊び」がどのようなきっかけから始まり，テーマが決定されるかという発展過程や役割分担の方法に焦点をあて，「ままごと遊び」の意義と保育者の適切な役割について調査した。3 歳以上児のままごと遊びのきっかけには，ある子どもが一人で遊び始め，それに興味を持った子どもが加わっていったり，仲間にままごとしようと提案したりしていることが確認された。一人で遊び始める，仲間に提案する，どちらにしても，ままごと遊びをするきっかけは，遊べる環境がその場にあることが重要であろう。また，一人が「ままごと遊び」を始めて，それに興味を持った子どもが加わったり，仲間への提案をきっかけとして，集団での「ままこど遊び」が展開されたりしていることから，いつでも「ままごと遊び」ができる環境が調っていることが子ども同士の人間関係を深める重

要な要素となっていることが示唆されるであろう。

（3）友達との関わりに着目した研究

次に，友達関係に関する研究の動向を概観してみよう。平嶋（2013）は，ままごとコーナーでの楽しさの共有を土台に友達との関係が変化していった 4 歳児の姿について報告している。浜田・西多（2003）は，4 歳児の幼児の自発的な遊びの中で，ままごとコーナーを中心に幼児の遊びを追う研究から，友達と関わり合いながら自分たちの生活をどのように創っていくかについて論考している。このように友達との関わりに関する研究は，3 歳以上児を対象としたものに多く見られる。これらの研究からも，「ままごと遊び」が，子ども同士の人間関係を深めることに大きな影響を及ぼしていることが示唆されよう。

（4）保育者の関わりに着目した研究

環境面だけでなく，そこに関わる保育者の関わりについて検討することも重要である。横山（2006）は，ごっこ遊びが見られない園，クラスでは，保育環境がごっこ遊びを生起させるための環境となっておらず，こうした保育環境での遊びは単発的で，時間的にも継続した遊びにならないと論考している。また，ままごと遊びの生起は園または保育者の意識が影響することも指摘している（横山，2006）。子どもの遊びが継続したり，発展したりするためには，ただ場所を整えておけばよいというわけではなく，園や保育者が「ごっこ遊び」や「ままごと遊び」にとっての望ましい環境を十分に意識することの重要性が示唆される。また，遊び方も年齢によっても異なるため，それぞれの年齢に応じた保育者の適切な関わりが必要になるであろう。

①保育者の言葉かけに関する研究

野口・小田・芦田・門田・鈴木・秋田（2005）は，3 歳児の「ままごと遊び」の中で保育者がどのように関わり，声かけをしているかビデオクリップを作成し，保育者に掲示し保育者の持つ価値観の言語化を行い，子ども中心志向が良い保育者イメージと結びつくことを明らかにした。二橋・上田（2012）は，ままごと遊びのエピソード記述をもとにインタビュー調査を行い，遊びが安定しているとき，保育者は援助の必要性を低く感じていること，安定か停滞かよく見る必要があること，保育の中の遊びには学びがなければならないこと，保育者は常に一人一人の視点と共にクラス全体の視点を持ち両面からの援助が求められることを指摘している。これらを始めとして，保育者の言葉かけに関する記述は 3 歳未満児に対する研究で論考されているものが多い（小椋・清水・鶴・南，2012）（玉川，2019）。

②道具や素材に関する研究

善本（2016）は，年齢に応じた遊びの発達を支える遊び道具の提案をしている。例えば，1 歳すぎでは，食材（お手玉や小さいボール野菜や果物の玩具など）と，中に十分なモノが入り子どもが扱いやすい大きさのやや深めな器があるとよいこと，素材の安全性の確保と誤飲防止の配慮が必要であることを提案している。2 歳前後は道具の取り合いなどのトラブルが起きやすいことから，道具の種類や数は子どもの人数に見合った十分な数が必要であること，また，一人でじっくり遊べる環境を設定する大切さがあること，4・5 歳児は自由に見立てたりつくったりできるような食材，素材，自然物を準備することで，作り出す楽しさを味わったり，工夫する力が生まれたりすると述べている。さらに，ままごと遊びは食へ

の興味につながる遊びであることを認識して，子どもが楽しく遊べる環境設定や働きかけ（援助）も必要であると示唆している。保育の場では，これらの年齢に応じた遊び道具を豊かに整えておくことで「ままごと遊び」も生起しやすく，子ども同士の人間関係が深まることにつながっていくことであろう。

ままごと遊びで使用する「食材おもちゃ」については，藤谷（2019）の研究が挙げられる。藤谷（2019）は，時代の移り変わりとともにプラスチックから脱プラスチック・手作り志向へ，布製や木製の素材へと大人の意識によって変わっていくことについて述べ，子どものためのおもちゃにとって本当に必要な要素とは何なのかを，我々大人が意識的に考えていく必要があると指摘している。このことから，「ままごと遊び」にかかわる道具についても保育者が十分に吟味をして用意することが重要であることが示唆されよう。

（5） 3歳未満児のままごと遊びに着目した研究

3歳未満児のままごと遊びに関する研究は，保育者の関わりを論じるものが多く見られる。例えば，玉川（2019）は，「ままごと遊び」の中で，言葉でのやり取りを基に分析を行い，2歳児のままごと遊びでは子どもがイメージしやすいよう，保育者が働きかけをしたり言葉をかけたり，応答的に関わる様子を確認した。また，小椋ら（2012）は，保育士は子どもの年齢にあわせ，コミュニケーション手段と発話内容を変化させており，保育士の適切な働きかけが子どものことばを伸ばしていることを明らかにした。川島（2020）は，ままごと遊びにおける子どもの学びを最大限に広げるための環境作りを目的とした保育実践から，遊びの環境について，毎月組のミーティングで検討を行い，課題の改善を行っている。保育現場での保育実践に関する記述では，複数担任である場合は保育環境の話し合いを十分に持つことで，よりよい環境設定が生じていることが理解できる。

藤田（2016）は，保育実践による1歳児のままごとコーナーの見直しとして，同じ物をたくさん用意することにより，トラブルもなく一人一人が自分の遊びを楽しみ，遊びこめるようになったと考察している。また，環境を考えていく上で，遊びの中で子どものエピソードに気づき，担任間でエピソードを共有したことも挙げている（藤田，2016）。保育者は，子どもの遊びや動き，興味のあることに十分に目を配り，職員間で連携しながら環境を整えていくことが求められる。

宅嶋（2022）は，遊ぶ人数と玩具の数，数が多いことが課題となったことを挙げ，子どもの興味や発達に合わせて玩具の種類や数を調節し，環境を見直している。必要数以上を準備したり，種類を絞ったり，保育者はクラスの実態や発達に応じて，適切に援助する視点も必要である。

これらの3歳未満児の研究から，年齢が低くなるほど，保育者の関わりや言葉かけ，援助が必要であり，3歳未満児の研究は，環境面はもちろん，保育者の配慮や言葉かけなどが多くなる傾向があると推測される。幼児の人間関係の発達を促すという観点から，3歳未満児については，「ままごと遊び」において，環境面の充実に加えて，特に保育者からの言葉かけが重要になることが示唆されるであろう。

５．総括と今後の課題

本論では「ままごと遊び」に関する研究の動向を先行研究により概観したが，環境に関する記述は分量に差はあれ，ほとんどの論文において述べられている。この環境については，物的環境・人的環境のどちらか一方ではなく，両方が絡み合っていることが示された。保育者はより良い環境構成，発達に応じた応答的な子どもとの関わり，保育の見守り，保育の振り返り，改善など様々な役割や視点が求められる。また，友達との関わりに関するものは 3 歳以上児の研究に論じられていることが多く，保育者との関わりは 3 歳未満児の研究に多く触れられていることが明らかとなった。

3 歳未満児対象の研究は，「ごっこ」「0 歳児」，「ごっこ」「1 歳児」など検索ワードを変更し探ったが，保育に関するものは少数である。しかしながら 0 歳から 2 歳まで加齢に伴って増えており，ごっこ遊び，ままごと遊びは年齢が高くなるにつれて遊ぶ機会が増えていることが窺える。

特に遊びのきっかけや，友達との関わりに関する「ままごと遊び」の研究成果から，「ままごと遊び」が幼児の人間関係を深める重要な機会となっていることが示唆されたことから，今後の研究では，「ままごと遊び」における，子どもの人間関係の深まりを効果的にする要因を探る必要があろう。

また，「ままごと遊び」と題名にままごとを使用しているのは多くの場合，保育現場の職員による保育実践論文であり，現場と研究者との間で 3 歳未満児の「ままごと遊び」に対する認識にもズレがあることも示唆された。今後は，3 歳未満児のごっこ遊び，ままごと遊びにも様々な観点から焦点を当て，詳細に検討していく必要があると考えられる。

引用・参考文献

秋田喜代美（2005）「ままごと遊び」から考えたこと（巻頭言），幼児の教育 104（5），4-7.

ベネッセ教育総合研究所（2023）第 6 回幼児の生活アンケート 2022　ベネッセ https://berd.benesse.jp/up_images/research/YOJI_all_P01_65_6.pdf（2024 年 1 月 7 日）

藤田茜（2016）私の園の保育環境 1 歳児クラス　ままごとコーナーの見直し，東京都公立保育園研究会の広報，2016（1），72-75.

藤谷未央（2019）日本社会における「食材おもちゃ」の意味づけ－子どもを取り巻く環境の変化とままごと用おもちゃの変化に着目して－，幼児の教育 118-4，50-61.

浜田貴宏・西多由貴江（2003）2 友達とかかわり合いながら自分が創る自分達の生活（4 歳児）：「忍者のイメージ」・「ままごとコーナー」を視点に（第 2 章事例研究）（第 1 部 金沢大学教育学部附属幼稚園第 49 回教育研究会に向けて），金沢大学教育学部付属幼稚園研究紀要，49，25-44.

長谷川万祐・古川聡（2007）PC097 ままごと遊びの意義と役割の発展過程，日本教育心理学会総会発表論文集，49（0），304.

平賀伸夫・平野あゆみ（2006）保育におけるラベル表示の効果に関する研究，愛知教育大学

教育実践総合センター紀要，9，203-209.
平嶋早織（2013）ごっこあそびの楽しさを共有することで変化したKの友だちとの関係：ままごとコーナーでの楽しさの共有を土台に，季刊保育問題研究，(260)，134-137.
五十嵐由利子・三田村利（2004）園庭での遊具の配置が園児の遊びに与える影響，日本家政学会研究発表要旨集，56（0），100.
金田利子（2006）家庭科教育と幼児教育の接点，日本家庭科教育学会大会・例会・セミナー研究発表要旨集 49（0），23.
川島千裕（2020）課題研究②遊びと学び 2 歳児組における「ままごと遊び」の有用性，保育実践研究・報告集，14，51-60.
河崎道夫（2015）ごっこ遊び　ひとなる書房
子ども家庭庁 https://www.cfa.go.jp/top/　（2024 年 1 月 7 日）
新村出（2018）広辞苑　岩波書店
厚生労働省（2017）保育所保育指針＜平成 29 年告示＞
厚生労働省（2018）保育所保育指針解説，フレーベル館
松原乃理子・大滝茜・織壁佐和子・富田貴代・深沢佐恵香・森末一代・請川滋大（2022）「ごっこ遊び」研究の傾向―保育実践を対象とした調査に着目して―，日本女子大学紀要家政学部，69，1-12.
村上智子（2020）園庭におけるままごと遊びの環境構成と遊びの変化，広島女学院大学幼児教育心理学科研究紀要，6，31-45.
箕輪潤子（2010）砂場におけるままごと遊びの発達的検討，川村学園女子大学研究紀要，21（2），53-67.
文部科学省（2017）幼稚園教育要領＜平成 29 年告示＞
文部科学省（2018）幼稚園教育要領解説，フレーベル館
内閣府・文部科学省・厚生労働省（2017）幼保連携型認定こども園教育・保育要領＜平成 29 年告示＞
内閣府・文部科学省・厚生労働省（2018）幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説，フレーベル館
野口隆子・小田豊・芦田宏・門田理世・鈴木正敏・秋田喜代美（2005）保育者の持つ“良い保育者”イメージに関するビジュアルエスノグラフィー，質的心理学研究，4（1），152-164.
小椋たみ子・清水益治・鶴宏史・南憲治（2012）3 歳未満児のままごと場面，読み聞かせ場面での保育士の働きかけ行動，帝塚山大学現代生活学部紀要，8，47-62.
二橋香代子・上田敏丈（2012）ままごとに対する保育者の遊び理解に関する研究，名古屋市立大学大学院人間文化研究科　人間文化研究，18，85-95.
大瀧ミドリ・田村綾子（2003）保育園児のままごと遊びの継続時間と既得知識における経済的変化，上越教育大学研究紀要，23（1），275-286.
大瀧ミドリ・田村綾子（2004）保育園児のままごと遊びにおける意味知識の経時的変化，上越教育大学研究紀要，23（2），731-740.
高橋節子（2021）進歩主義教育思想と幼稚園の物理的環境―クロンク記念幼稚園の場合―，人間環境学研究，19（2），133-134.

宅嶋郁（2022）1 歳児のままごと遊び～模倣・見立て・再現遊びを楽しめる環境作り～，東京都公立保育園研究会の広報，2022（3），48-53.
玉川朝子（2019）2 歳児クラスのままごと遊びにおける保育者の応答的関わりの一考察，大阪総合保育大学紀要，14，43-58.
小松孝至（2006）母子の会話の中で構成される幼児の自己：「自己と他者との関連づけ」に着目した 1 事例の縦断的検討，発達心理学研究，17（2），115-125.
横山文樹（2005）ままごと遊びの再考（1）：ごっこ遊びの意義とままごと遊びの位置づけ（幼児教育），学苑　昭和女子大学紀要，776，114-123.
横山文樹（2006）ままごと遊びの再考（2）：遊びのプロセスからの検証(幼児教育)，学苑　昭和女子大学紀要，788，62-73.
善本眞弓（2016）時代を反映する子どものままごと遊びと保育者の役割，芸術教育，95，12-14.